

「蝶々」の今日的様相
—5歳児を対象とした聞き取り調査と保育者を対象とした質問紙調査をもとに—

羽根田 真 弓

Mayumi HANEDA :

The Current Status of the Song "Chocho"

—Based on the Analysis of an Interview-based Investigation of Five-year-old Children and
a Questionnaire Survey to Teachers in a Center for Early Childhood Education and Care—

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第76号 抜刷

2018年1月

「蝶々」の今日的様相 —5歳児を対象とした聞き取り調査と保育者を対象とした質問紙調査をもとに—

羽根田 真 弓¹

Mayumi HANEDA: The Current Status of the Song "Chocho"

—Based on the Analysis of an Interview-based Investigation of Five-year-old Children and a Questionnaire Survey to Teachers in a Center for Early Childhood Education and Care—

歌唱教材「蝶々」の原曲をスペイン民謡とする根拠は伊澤修二の記述に因るものであり、野村秋足の詞であるとする根拠も不明である。「蝶々」は「小学唱歌集初編」の中で誕生し、以降135年が経過した。この歌唱教材「蝶々」の5歳児を対象とした聞き取り調査および保育者を対象とした質問紙調査では、歌唱教材に設定された場合に子どもたちの「蝶々」の歌唱実態が見られ、保育者には季節の歌として認識されていることが明らかとなった。

キーワード: 「蝶々」 小学唱歌集初編 伊澤修二 L.W.メーソン 歌唱教材

1. 問題の所在と目的

歌唱教材「蝶々」の存在およびその旋律は、保育者養成課程で学ぶ保育学生たちによって周知されている。そして保育学生たちが「蝶々」を幼児期に歌唱していることは、入学後の授業科目「音楽」において例年確認している。しかしながら、保育学生たちは「ちょうちょ ちょうちょ なのはにとまれ」までしか歌唱できないのである。つまり、次のフレーズである「なのはにあいたら」以降の歌詞が歌えない。さらには「なのはにあいたら」の詞の意味が理解できない学生も多く、最後のフレーズである「とまれよあそべ あそべよとまれ」の歌詞の部分も歌えないのが実態である。

このように保育学生たちが幼児期に歌唱した「蝶々」を旋律は記憶していながら、歌詞については最初のフレーズしか再現できないのは単なる記憶の問題と言えるのであろうか。はたして、保育学生

たちは幼児期に「蝶々」をどのように歌唱していたのであろうか。

本研究では、今日の保育現場において「蝶々」は子どもたちによってどのように歌われているのか、特に歌詞に着目して5歳児を対象とした聞き取り調査を行う。後述するが、「蝶々」はわが国では135年前から歌唱されており、今日では伝統的な歌唱教材の一つと言えよう。そこで「蝶々」を5歳児がどのように歌唱するのか実態を明らかにする。

一方で、保育者はわが国で最初の歌唱教材の一つである「蝶々」をどのように捉え、今日の保育現場でどのように引き継いでいるのか、保育者の伝統的な唱歌に対する意識を明らかにする。

ところで、歌唱教材「蝶々」については、スペイン民謡と記載する曲集および文献がこれまで多く見られた。そして、作詞は野村秋足であると記載されてきた。しかし、今日ではドイツ民謡、作詞者不明となっている。併せて本稿ではわが国で歌唱教材「蝶々」が誕生した背景について、先行研究をもとに音楽史的にまとめる。

1 鳥取短期大学幼児教育保育学科

2. 「蝶々」の音楽史的アプローチ

「蝶々」がわが国で初めて演奏されたとする記述は、明治14年(1881)11月に文部省音楽取調掛編纂「小学唱歌集初編」が刊行される以前に見られる。それは同年7月7日に行われた音楽取調掛伝習生の取調掛期末試業において、「唱歌ノ部」に、「閨の板戸」とともに「蝶々」が「洋琴ヲ用キテ唱フ分」として記されている¹⁾。つまり音楽伝習生が編纂中の唱歌集を教材として用い、「蝶々」をピアノ演奏しながら歌唱しているのである。さらに、明治15年(1882)1月30日および31日の両日、音楽取調掛の成績報告のための大演習が東京師範学校の昌平館で開催されており、31日に東京女子師範学校附属小学校生徒143名が唱歌斉唱として「蝶々」をL.W.メーソンのピアノ伴奏で歌っている²⁾。

「小学唱歌集初編」が明治14年11月に刊行されたと上述したが、この初編の奥付には明治14年11月刊行となっているものの、実際に印刷されたのは翌年の4月であり、この時3000部が発冊されて直轄諸学校や諸府県、外国教育家等に配布されている³⁾。したがって、「小学唱歌集初編」がわが国の小学校で使用されて子どもたちが「蝶々」を歌い始めるのは明治15年以降である。つまり、明治5年(1872)に学制が発布されて10年が経過し、「当分之ヲ欠ク」とされていた科目「唱歌」がようやく開始され、子どもたちが一般的に「蝶々」を歌うようになったと言える。今から、135年前のことである。

さて、「蝶々」の原曲はスペイン民謡、一番の歌詞の作詞者は野村秋足、二番の歌詞の作詞者は稲垣千穎であるとされてきた。これらは1991年に講談社から発行された『日本のうた ふるさとのうた100曲』にも記載されている。こればかりかこれまで多くの曲集や文献においてもスペイン民謡、野村秋足作詞と記載されていた。

ところが、今日では「蝶々」はドイツ民謡、作詞者不明であるとされている。具体例では教育芸術社

より平成23年(2011)に発行されている『小学生のおんがく1』には、作詞者不明、ドイツ民謡と記載されている。池田によれば、平成9年(1997)2月に発行された上記教科書でも同様に作詞者不明、ドイツ民謡と記載されており、昭和22年(1947)に文部省から発行された『一ねんせいのおんがく』においても作詞者不明、ドイツ民謡と記載されている。しかし、昭和62年(1987)に東京書籍から発行された『新編あたらしいおんがく1』では、野村秋足作詞、スペイン民謡となっている⁴⁾。ところが同出版社から平成23年に発行された『あたらしいおんがく1』には、作詞者不詳、スペイン民謡となっており、この他にもスペイン民謡、作詞者不明とする記載例を確認した。このように「蝶々」はスペイン民謡とドイツ民謡が混在して記載されており、作詞者についても異なる記載が見られる。

スペイン民謡であるとされるのは、伊澤修二が上記の昌平館で開催された大演習の『唱歌略説』において、「楽譜ハ出所ヲ詳ニサザレドモ西班牙ヨリ伝来シテ諸邦ニ行ハレタルモノナルベシトイヘリ」⁵⁾と執筆していることから、これまでは一般的に「蝶々」はスペイン民謡であるとされてきた。またスペイン民謡であるとする説では、根拠は明らかではないとしながら江戸時代以前からイスパニアとの貿易を通じて日本に伝えられていたとする説もある⁶⁾。

「蝶々」は、伊澤がアメリカ留学中にL.W.メーソンから教授された曲であることは伊澤の記述から明らかである。伊澤が留学していたのは明治8年(1875)から明治11年(1878)であるが、櫻井によれば、19世紀から20世紀初頭のアメリカでは、この原曲についてスペイン民謡説とドイツ民謡説があったとされる。ボストンのL.W.メーソン宅で伊澤にL.W.メーソンが示したのは“The Boat Song”であり、歌詞は“Lightly row Lightly row”である。当時アメリカで出版されているLowell MasonおよびGeorg James Webb共編の唱歌集や他の歌曲集ではスペインメロディとされており、一方“Lightly

Row”のピアノ変奏曲はドイツメロディとされている。そしてL.W.メーソンはドイツのホームマンの唱歌教科書からこの曲を採用したと櫻井は指摘している⁷⁾。

ドイツ民謡とする先行研究では、原曲は、1710年頃成立したとされ⁸⁾、曲名は“Alles neu macht der Mai”もしくは“Hänschen klein”である。いずれも作詞者名は明らかである。さらに、昭和60年代に実施されたNHKの実施調査で、「蝶々」の原曲はドイツ北部の牧草地帯で狩猟用のホルンで羊を呼び寄せるための曲であるとする一説もあり、1719年にメロディが変化して上記の“Hänschen klein”として歌詞が付けられたとされている⁹⁾。

ドイツでは2つのテーマでこのメロディが歌われてドイツ民謡となっており、ドイツの文献でドイツ民謡として掲載されていることは確認できた¹⁰⁾。一方、スペイン民謡であるとする根拠は伊澤の記述以外に見いだせず、スペイン民謡であるとする根拠が存在しないことは、安田によってもすでに述べられている¹¹⁾。

こうしたことから、スペイン民謡であるとする伊澤が「小学唱歌集初編」をL.W.メーソンとともに編集作業をするうえで、また上述の大演習でも伊澤とL.W.メーソンの接点がある中で、L.W.メーソンも伊澤のスペイン民謡説を受け入れていたのかという疑問が浮上する。竹内は、ヨーロッパにおける吟遊詩人の存在をあげながら、同じメロディがヨーロッパ内に伝わったとし、伊澤とL.W.メーソンの二人が当時のアメリカの認識であるスペイン民謡としたと述べている¹²⁾。

そこで、筆者がスペイン大使館に文書で直接問い合わせをした結果、スペインで知られている歌ではなく、スペイン民謡ではないとする電子メールによる回答をスペイン大使館文化部より得た。やはり、「蝶々」がスペイン民謡であるとする説は成立しない。

ところで、「蝶々」は、伊澤がアメリカ留学中にL.W.メーソンから教わり、それをアメリカから日

本に持ち帰って「小学唱歌集初編」に掲載したということは定説である。しかしながら、この時代背景において、安田の説は「蝶々」を述べるうえで見逃すことができない¹³⁾。その内容は、「蝶々」が日本にもたらされたとする同時期に、アジア太平洋では讃美歌として伝えられていたという説である。当時キリスト教を布教するためのモーニング・スター号によってキリスト教伝道目的以外にも生活物資が運ばれ、この時に「蝶々」のメロディである“Lightly Row”が1870年代にはミクロネシアの島では讃美歌として普及していたのである。つまり、日本の子どもたちが「蝶々」を歌い始めたまさしく同時期にアジア太平洋では同じ曲が讃美歌として歌われていたのである。安田は、「蝶々」以外にも「見わたせば」（むすんでひらいて）と「蛍」（蛍の光）も同時期にアジア太平洋で讃美歌として歌われていることを指摘している。アメリカで歌われていた「蝶々」の原曲が讃美歌としてアジア太平洋に伝えられていたという事実はあるとしても、「蝶々」が讃美歌とどのように関連するのかは明確にはされていない。しかしながら実際には、「小学唱歌集」の初編から三編までの91曲のうち、15曲が讃美歌と同様であるとされている¹⁴⁾。

次に「蝶々」の歌詞について述べる。

既述したように、これまで「蝶々」は野村秋足、稲垣千穎の詞であるとされてきた。野村秋足の詞とする根拠は、伊澤が愛知師範学校校長であったときに教員であった野村秋足に作詞を命じたとする説に因るものである¹⁵⁾。伊澤が愛知師範学校校長であったのは伊澤が24歳の時、明治7年（1874）であり、翌年に伊澤はアメリカに留学している。そしてボストンのL.W.メーソンの家で「蝶々」が誕生した状況について、伊澤自身が記した『メーソンを弔ふ』の中で、「(前略) ライトリーロウ、ライトリーロウに代ふるにチョーチョ、チョーチョを以てするなど今日、我國の學校唱歌發達の仁子ともいふべきものは、早くもメーソン氏が家隅の一室中に成立てるなりけり (後略)」と伊澤は述べている¹⁶⁾。さらに伊

澤は『予が關係したる創業教育』の中で、「『蝶々蝶々 菜の葉に生まれ』の唱歌の楽譜は、實は當時 L.W.メーソンの宅にて作ったものである」と記している¹⁷⁾。これらの記述から、明治9年(1886)に目賀田種太郎および三岡丈夫らとともにL.W.メーソン宅で音楽を教授され、この時にL.W.メーソンから提示された「蝶々」の旋律に伊澤が歌詞をあてはめたと考えることは可能である。

湯川によれば、伊澤は南校時代に教師であったフルベッキからフレーベルに関する本を借りて「唱歌遊戯」を知ったとされる¹⁸⁾。そして下等小学の生徒に「唱歌遊戯」を実施するため、国学者であった野村に地方にある面白い童謡を探すように命じ、そして小学唱歌集初編の「蝶々」の歌詞はこの時にできたと伊澤自身が述べている¹⁹⁾。しかし伊澤がL.W.メーソン宅でL.W.メーソンからさしだされたラブレローの楽譜につけたとする詞が伊澤からの命で作られた野村の詞であることを示す資料および文献は本研究では見いだせていない。

伊澤が試みた「唱歌遊戯」の一つは「胡蝶」であり、その詞は、「蝶々蝶々、菜ノ葉ニ止レ、菜ノ葉ニ飽タラ、桜ニ遊ヘ。桜ノ花ノ、栄ユル御代ニ、止レヤ遊ベ、遊ベヤ止レ」である。この「胡蝶」の詞は、愛知に伝わるわらべ歌から採集していたとされている²⁰⁾。そのわらべ歌の歌詞は、「蝶蝶生まれ、菜の葉に生まれ、菜の葉が枯れたら木の葉に生まれ」である。このわらべ歌は、明治10年(1877)に愛知県の教育者吉川楽平によって『国語教授式』という解説書にも例文としてあげられており²¹⁾、愛知県にこのようなわらべ歌があったことは明らかである。

そして、全国的にも蝶々に関するわらべ歌が存在し、江戸時代から歌われていたわらべ歌である「蝶々ばっこ 蝶々ばっこ 菜の葉に生まれ 菜の葉に飽いたら この手に生まれ」に野村秋足が「この手に生まれ」を「桜に生まれ」とした説もある²²⁾。この説は、大正3年(1914)の『小学唱歌集評釈』においても確認できる。享保時代からの童謡である「て

ふてふ とまろば 菜の葉にとまれ 菜の葉いやなら わが手にとまれ」が基になっており、そのために「アイタラ」の俗語^{ツネコトバ}を用いているとしている²³⁾。

「蝶々」の一番の歌詞は、愛知県のわらべ歌もしくは江戸時代から蝶採集の時に歌われていたわらべ歌が基になっていることは考えられる。しかし、上記の「胡蝶」と今日の「蝶々」の旋律が同一であるか否かは不明であり、「胡蝶」の詞が愛知県地方に伝わるわらべ歌から作られたのか、野村の作によるかは明らかにできなかった。そしてL.W.メーソン宅であてはめたとする詞の内容も明らかにすることもできず、「蝶々」が野村の作であるとする確証は見いだせなかった。このように、小学唱歌集初編の「蝶々」がスペイン民謡であること、野村の作詞とする確かな根拠等、不明な点が多い。

なお、「栄ユル御代ニ」の部分は、戦後の音楽教科書で「花から花へ」に変わった。そして二番の歌詞については、小学唱歌集初編に掲載されている。ところが明治29年(1896)に初編、第二編、第三編を一冊にして出版した教育音楽講習会編纂による「新編教育唱歌集」では、三番と四番の歌詞が掲載されている。しかし、初版から記載されているかどうか、さらに作詞者も不明である。それぞれの歌詞は、以下のとおりである。

三番

とんぼ とんぼ こちきてとまれ
垣根の秋草 いまこそ盛り
さかりの萩に 羽根うち休め
生まれやとまれ 休めややすめ

四番

つばめ つばめ 飛びこよつばめ
古巢を忘れず 今年もこゝに
かへりし心 なつかし嬉し
とびこよつばめ かへれや燕²⁴⁾。

今日では一番のみが歌唱されているが、そもそも「小学唱歌集」が刊行された時代の学校教育では文語体が使われ、外国の旋律に歌詞を付ける場合必然的に文語体²⁵⁾が用いられる。「みわたせば」はその代

表例であり、「蝶々」は命令形による歌詞である。

加えて、わが国で最初に行われた唱歌教育は徳育を目的としていた。このことは、戦前まで歌われていた一番の歌詞、現在では歌われないものの二番、三番および四番の歌詞内容に示されている。

さらに、わが国で「蝶々」をはじめとした唱歌教育はピアノもしくはオルガンの伴奏を伴って開始され、今日ではわが国独特の伝統的な唱歌教育のスタイルとなっていることは確かである。

3. 5歳児を対象とした聞き取り調査

(1) 聞き取り調査対象児

聞き取り調査の対象は、鳥取県内の認定こども園3園の5歳児である。個別の聞き取り調査が可能な年齢であること、歌唱による音楽表現活動を十分にを行っている年齢であることから対象年齢を5歳とした。調査した5歳児は、100名（男児43名、女児57名）である。

(2) 調査の手続き

「蝶々」の最初のフレーズ「ちょうちょ ちょうちょ」の部分(2小節)を歌いながら個別に質問した。質問内容は、『ちょうちょ ちょうちょの歌を知っていますか。知っていたら聞かせてください』とし、5歳児を対象とする言葉かけに配慮して聞き取りを行った。なお、本研究の目的と方法および倫理的配慮については、調査実施園に説明を行い、了承を得て園との信頼関係のもとに調査を実施した。

聞き取り調査の実施は、「蝶々」が歌われる季節を考慮して平成29年5月を設定し、A園は5月9日および15日、16日の3日間、B園は5月18日、C園は5月25日に実施した。聞き取り調査を行った場所は、A園では保育室および遊戯室であり、筆者が対象児に任意に聞き取りを行った。B園およびC園は、保育室内に対象児が一人ずつ入室して聞き取り調査を行った。方法は、ICレコーダーを用いて録音した。

(3) 結果

聞き取り調査結果は、表1のとおりである。対象児が歌唱した歌詞をそのまま記載した。また旋律を口ずさみながら言葉で聞き取れない箇所は、一で記載し、「蝶々」を知らないと回答した場合は、空欄で示した。

筆者が「ちょうちょ ちょうちょ」の2小節を歌いながら質問したため、「蝶々」を知っていると回答した子どもたちは、ほぼ全員が出だしのフレーズ(2小節)もしくは歌唱部分において「蝶々」の旋律を正確に歌唱していた。

「蝶々」を最初から最後まで正確な歌詞で歌唱した5歳児は、男児3名、女児4名の7名(7%)であった。そして、今回の聞き取り調査において、表1に示されるように園によって子どもたちの歌唱実態に大きな偏りが見られた。

A園では、「歌を知らない」と回答した子どもが44名中24名見られた一方で、「ちょうちょ ちょうちょ なのはにとまれ」までを歌唱した子ども、および「ちょうちょ ちょうちょ」の最初のフレーズのみを歌唱した子どもも散見できる。しかし、最初から最後までを歌唱した子どもは観察できなかった。

B園では、日本文化の経験がない園児、質問してもうつぶいたままの状態であった園児の2名を除いた子どもたちが「蝶々」を知っていると回答した。知っていると回答した子どもたちは、歌の前半までをおおよそ歌唱しているものの、『なのはにとまれ』の部分、『なのはにあいたら』の部分歌唱した子どもは3名、また『なのはにさいたら』と歌う子どもが2名、『なのはにとまる』『なのはにとまったら』と歌う子どもがそれぞれ1名観察できた。最初から最後まで正確に歌唱した子どもは確認できなかった。

C園では対象児全員が「蝶々」を知っていると回答して何らか歌唱している。最初から最後まで歌唱した子どももC園児である。また『なのはにあいたら』の部分歌唱した子どもも6割以上の割合で

表1 聞き取り調査結果

	NO.	性別	歌唱状況							
A こ ど も 園	1	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	ちょうちょ	ららら	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ
	2	男								
	3	男	ちょうちょ	ちょうちょ						
	4	男								
	5	女								
	6	女								
	7	女								
	8	男								
	9	女	ちょうちょ	ちょうちょ	おはなにとまれ	なのはな				
	10	女	ちょうちょ	ちょうちょ						
	11	女	ちょうちょ	ちょうちょ						
	12	男	ちょうちょ	ちょうちょ						
	13	女								
	14	女								
	15	女								
	16	男								
	17	女								
	18	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ					
	19	女	ちょうちょ	ちょうちょ						
	20	女								
	21	男								
	22	男	ちょうちょ	ちょうちょ						
	23	男								
	24	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ			
	25	女	ちょうちょ	ちょうちょ						
	26	男	ちょうちょ	ちょうちょ						
	27	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはとんだ					
	28	男								
	29	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ					
	30									
	31	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ					
	32	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのは				
	33	女								
	34	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	-のはにとまれ			
	35	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	とまれよあそべ	あそべよとまれ			
	36	女								
	37	男								
	38	男								
	39	女	ちょうちょ	ちょうちょ						
	40	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ					
	41	女								
	42	女								
	43	女								
	44	男								
B こ ど も 園	45	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ					
	46	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたらさくらにとまれ	さくらのなは			
	47	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ					
	48	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにとまったら				
	49	女	ちょうちょ	ちょうちょ	さくらにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ			
	50	女								

「蝶々」の今日的様相

	NO.	性別	歌唱状況									
B こ ど も 園	51	男	ちょうちょ	ちょうちょ								
	52	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにさいたら	さくらにとまれ	なのはのはなの	さくらははなの	とまれよあそべ	とまれよあそべ	
	53	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはに-----	さくらにとまれ					
	54	男	ちょうちょ	ちょうちょ	おはなにとまれ							
	55	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ	さくらははなの	はなからとまれ	とまれよはなれ	とまれよはなれ	
	56	男	ちょうちょ	ちょうちょ	おはなにとまれ							
	57	男	ちょうちょ	ちょうちょ	おはなにとまれ	なのはに						
	58	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	----- (メロデイのみ)						
	59	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにとまる						
	60	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにさいたら	さくらにとまれ	さくらははなの	はなからはなへ			
	61	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはな							
	62	女	ちょうちょ	ちょうちょ	おはにとまれ	ちょうちょ	ちょうちょ	おはなにとまれ				
	63	男	ちょうちょ	ちょうちょ	おはなにとまれ							
	64	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはに---	さくらにとまれ					
	65	女	ちょうちょ	ちょうちょ	あのはなとまれ	ちょうちょ	ちょうちょ					
	66	男										
	67	男	ちょうちょ	ちょうちょ								
	68	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ							
	69	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なになにとまれ							
	70	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにとまったら	さくらにとまれ	さくらははなは				
	71	男	ちょうちょ	ちょうちょ	あのはなとまれ	ちょうちょ	ちょうちょ					
	72	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ							
	73	男	ちょうちょ	ちょうちょ								
	74	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはに						
	75	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なの							
C こ ど も 園	76	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ	さくらははなの	はなからはなへ	とまれよあそべ	あそべよとまれ	
	77	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいた	なのはのはなの	はなからはなへ	とまれよあそべ	あそべよとまれ		
	78	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ	さくらははなの	はなからはなへ	とまれよあそべ	あそべよとまれ	
	79	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにのはなにとまれ	とまれよあそべ	あそべよとまれ			
	80	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ	さくらははなの	はなからはなへ	とまれよあそべ	あそべよとまれ	
	81	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ	さくらははなの	はなからはなへ	とまれよあそべ	あそべよとまれ	
	82	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ	さくらははなの	---	とまれよあそべ	あそべよとまれ	
	83	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ							
	84	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはなとまれ	なのはなあいたら	さくらにとまれ	さくらははなは				
	85	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ	さくらははなの	はなからはなへ	とまれよあそべ	あそべよとまれ	
	86	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	さくらのきにとまれ						
	87	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにとまれよ	さくらにとまれ	さくらにとまれ				
	88	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ	さくらははなは	おはにあそべ	なのはにあそべ	なのはにあそべ	
	89	女	ちょうちょ	ちょうちょ								
	90	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ							
	91	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ							
	92	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにとまった						
	93	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ	さくら				
	94	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ							
	95	女	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ	さくらははなの	はなからはなへ	とまれあそべ	あそべよとまれ	
	96	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ	さくらははなの	はなからはなの	とまれよあそべ	とまれよあそべ	
	97	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	とまったら	さくらにとまれ	さくらに---				
	98	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ	さくらははなへ	はなからはなへ	とまれよあそべ	あそべよとまれ	
	99	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	なのはにさくらにとまれ	さくらははなの	はなからはなへ	とまれよあそべ	あそべよとまれ	
	100	男	ちょうちょ	ちょうちょ	なのはにとまれ	なのはにあいたら	さくらにとまれ	さくらははなの	はなからはなへ	とまれよあそべ	とまれよあそべ	

16名観察された。後半の部分も10名の子どもたちが歌っている。歌詞に曖昧な部分が見られても旋律は子どもたちによって正確に歌唱されていた。なお歌唱における男女差は全体に見られなかった。

4. 保育者を対象とした質問紙調査

(1) 調査対象者

本調査の対象者は、5歳児を対象とした「蝶々」の聞き取り調査を実施した認定こども園3園の保育者である。回答は、男性保育者4名、女性保育者32名、合計36名から得た。回答者の年代層は、20代が16名、30代11名、40代8名、50代1名である。

(2) 調査の手続き

無記名による回答で、調査実施時期は5歳児を対象とした聞き取り調査と同じ平成29年5月である。なお、本研究の目的、方法および倫理的配慮については、園および調査対象者に説明し、回答による同意とした。

質問項目は、次の7項目である。

- 1) 「蝶々」を歌唱教材として用い、子どもたちと歌っているか
- 2) 教材としている理由
- 3) これまで「蝶々」の歌詞に疑問を持ったことがあるか
- 4) 「蝶々」を歌唱する時の子どもたちの様子
- 5) 今後も「蝶々」を歌唱教材として使用するか
- 6) 「蝶々」の歌詞が文語体であることについてどのように思うか
- 7) その他

項目1)は4段階評価で回答を求め、項目2)、4)および6)はあらかじめ設定した項目から複数回答を求めた。

(3) 結果

項目ごとに結果を示す。

1) 「蝶々」を歌唱教材として用い、子どもたちと歌っているか

結果は表2のとおりである。

表2 「蝶々」を歌唱教材として用い、子どもたちと歌っているか

項目	A園	B園	C園	合計
よく歌う	1	7	8	16
時々歌う	4	5	8	17
どちらかと言えば歌わない	2	1	0	3
全然歌わない	0	0	0	0

(単位:名)

「蝶々」は今日の保育現場において歌われている。「よく歌う」「時々歌う」と回答した保育者の割合は、全体の92%である。そして「全く歌わない」とする回答は無く、「どちらかと言えば歌わない」とする回答が3名見られた。この回答理由は、「教材曲として設定されていない」と「ちょうちょを見て口ずさむことはあっても、ピアノ伴奏をしながら一斉歌唱する場面がない」であった。

2) 教材としている理由

あらかじめ6項目を設定して複数回答で回答を求めた。結果は、表3のとおりである。

表3 教材としている理由

項目	A園	B園	C園	合計
よく知られている歌だから	2	6	9	17
子どもたちにとって覚えやすい歌である	1	5	2	8
子どもたちにとって歌いやすい歌である	0	2	5	7
季節の歌としてふさわしい	4	11	15	30
教材曲として設定している	0	2	2	4
その他	1	0	0	1

(単位:名)

「蝶々」が保育現場においては季節の歌として捉えられ、教材として使用されていることがわかる。また、よく知られている曲として認識されている。そして教材曲として設定されない場合も見られ、教材曲として設定してあるか否かによって表1の5歳児の歌唱結果と因果関係にあることが明確である。

3) これまで「蝶々」の歌詞に疑問を持ったことがあるか

「歌詞に疑問を持った」と回答した保育者は11名、「歌詞に疑問を持ったことがない」と回答した保育者は24名であった(欠損値1)。したがって、およそ全体の7割の保育者が歌詞に疑問を持っていないことが明らかとなった。

4) 「蝶々」を歌唱するときの子どもたちの様子について

あらかじめ8項目設定し、複数回答を求めた。結果は、表4のとおりである。

「蝶々」は、歌詞が正確に歌えない場面があるものの、子どもたちにとって問題なく、違和感がないことがうかがえる。子どもたちが日常的に歌っている、愛唱していることについては、B園およびC

表4 「蝶々」を歌唱するときの子どもたちの様子

項目	A園	B園	C園	合計
子どもたちは問題なく歌っている	4	6	6	16
子どもたちにとって違和感はない	3	5	5	13
子どもたちは愛唱している	0	4	4	8
日常的に歌っている	0	8	3	11
文語体部分の歌詞が正確に歌えていない	1	5	3	9
歌詞を覚えていない	1	0	1	2
メロディのみ認知している	2	3	2	7
文語体の歌詞を質問する	1	0	1	2

(単位：名)

園で確認される。また、歌詞について質問する子どもがいることも確認できる。

5) 今後も「蝶々」を歌唱教材として使用するか

「使用する」と回答したのは35名、「どちらでもない」が1名であった。したがって、今日の保育現場においても「蝶々」が受け入れられ、今後も歌い続けたいという意味が示されている。

6) 「蝶々」の歌詞が文語体であることについてどのように思うか

あらかじめ設定した項目で複数回答を求めた結果、「子どもに理解できない文語体は歌唱教材としてふさわしくない」とする回答は皆無であった。「伝統的な歌唱教材であるから特に問題を感じていない」とする回答は27名であり、全体の75%であった。「歌詞に違和感はあるものの、周知の歌なので子どもたちと歌う」とする回答が3名、「歌詞について特に考えたことがない」とする回答は8名であった。

質問項目7)では、歌詞についてこれまで考えたことがないとする意見、昔から歌われている歌は新しい時代にも引き継いでいきたいとする意見、保護者から童謡を歌わせてほしいとする意見が見られた。

5. 5歳児を対象とした聞き取り調査と保育者を対象とした質問紙調査の考察

「蝶々」の歌詞は、いわゆる童謡や子どもの歌の歌詞と異なり、俗語である「あいたら」が使われ、加えて命令形による歌詞のために強い口調となっている。そのため子どもたちが「蝶々」の歌詞に抵抗感を示すことを予測して今回の聞き取り調査を実施した。さらに、「蝶々」が誕生した時代背景では、文語体による歌詞が用いられたことから、子どもたちがどのようにこの歌を歌唱するのか実態を明らかにすること、および保育現場でどのように「蝶々」が教材として認識されているのか明らかにすることが本研究の目的であった。

保育者を対象とした質問紙調査からは、子どもた

ちが文語体の歌詞の部分に正確に歌えていないとする回答も見られたが、子どもたちへの聞き取り調査において、C園では子どもたちは正確に歌唱していた。この背景は、4月下旬より、子どもたちが園の近くに散歩に出かけ、ちょうちょを発見し、その後の保育において「蝶々」の歌唱活動を行っていた。最初は子どもたちが自由に歌詞を歌っていたが、保育室の壁に歌詞カードを貼り、毎日保育者と歌唱していた。さらに、C園では「蝶々」が歌唱教材として設定しており、子どもたちも歌詞を見ながら保育の中で歌唱をしていた。したがって、C園の調査結果から、教材設定と子どもたちの歌唱に明らかな因果関係が認められる。また、調査時期が子どもたちの歌唱活動直後であったことが調査結果として示されている。

B園においても「蝶々」は歌唱教材として設定されていた。そして蝶々がなのはな、さくらに止まる様子が正確な歌詞ではないもの子どもたちにイメージされながら子どもたちに表現されていた。

A園では、歌唱教材として設定されていないことが今回の子どもたちの聞き取り調査の結果に表れている。一方で「なのはにとまれ」の部分まで歌唱する子どもも観察され、最初の2小節のフレーズを歌唱する子どもも全体のおよそ半分いることから、5歳以前に何らかの歌唱経験があることが考えられる。しかし、「蝶々」の歌唱活動を行っていないとする報告を園側から受けており、今回の調査結果で示されるように子どもたちの「蝶々」の歌唱実態としては認められなかった。

このように、歌唱教材としての設定および保育現場における歌唱活動の方法が子どもの歌唱実態と関連することは明らかである。つまり、歌唱教材として設定されていることによって、子どもたちがわが国で最初の唱歌の一つである「蝶々」を今日でも歌っていると言えよう。A園では歌唱教材として設定されておらず、今回の聞き取り調査では子どもの歌唱実態は確認できなかった。また、保育者の質問紙調査結果においても、A園では子どもが日常的に

歌っている、あるいは愛唱していると回答されておらず、歌唱教材としての有無によって子どもたちの歌唱実態につながることは明らかである。言い換えれば、歌唱教材として設定することによって、今後「蝶々」が歌い継がれる可能性がある。

そして今回、保育者を対象とした質問紙調査では文語体であるという断定的表現を用いて質問項目を設定した。調査結果では、歌詞に対する疑問を3割の保育者が持っており、伝統的な歌唱教材であるからという認識が優先されていた。そして、季節にふさわしい歌として捉えられ、さらにはこれからも受け継ぎたいという明確な意思が示されている。

また、命令形による強い指示語である歌詞、さらには俗語とも言える歌詞は子どもにとって難解であり、今日の子どもたちがいわゆる「唱歌」に対して抵抗感を持つことを予測したが、C園の調査結果からはそのような実態は観察できなかった。これは「蝶々」が誕生した時代では教訓的な内容が意図された教材であったものの今日では「蝶々」という子どもたちの身近な素材を題材にした教材、季節の歌として捉えられているからであると考えられる。

今回、「蝶々」の歌詞に着目して5歳児の歌唱調査を実施した。そして、教材設定がなされている保育現場の子どもたちによって「蝶々」は歌い継がれていた。つまり、文語体や現代の子どもたちにとって親しみのない歌詞を私たちがどのように受け止め、どのように教材として捉えていくのかを考えることによってこれらの伝統的唱歌を今後も継承することができるのではなかろうか。これら唱歌、さらにはわが国の児童文化史上において誕生した子どもの歌への歌唱教材としての意識を明確に持つことが大切であることを強調したい。保育現場におけるこれらの歌唱教材に対する認識を明確にもつことで、これら唱歌の継承ができるようになる。

わが国で最初の唱歌の一つである「蝶々」は、「小学唱歌集初編」での誕生から1世紀以上経過した今日において、外国曲が原曲であるものすでに日本の歌として定着していると言えよう。これらの歌唱

教材が将来どのように継承されていくのか、歌唱教材として設定された場合の子どもの歌唱実態をふまえ、これら唱歌をどのように捉えていくのか考えなければならぬ。

6. 今後の課題

「蝶々」は、今日の子どもたちには聞きなれない歌詞である反面、「ちょうちょ」という子どもたちの身近な素材、わらべ歌にも採集される子どもたちの生活感情を取り入れた歌詞内容、シンプルなリズム、そして何よりも讃美歌と関連した旋律であることが子どもに歌いやすい要因となっていることが考えられる。しかし今回の調査では、聞きなれない歌詞であるから子どもたちが歌わないという結論には至らなかった。歌唱教材としての設定と子どもの歌唱行動が密接に関連していたのである。

また、保育学生たちが歌詞を再現できないのは、幼児期に保育者と一緒に歌唱活動を行ったとしても、命令口調である歌詞のスタイルは他に例がなく、旋律だけは明確に記憶されていながら、今日使用しない、あるいは親しみのない歌詞であることによって再現できないと考えられる。

「蝶々」が誕生した時代背景による歌詞だけの要因だけでは子どもが歌わないとする関連性は見いだせなかった。しかし、「蝶々」が将来、どのように歌い継がれていくのか、これら唱歌をどのように発展させていくのかについてあらためて考える必要があり、唱歌への明確な意思が求められる。

引用・参考文献

- 1) 遠藤宏『明治音楽史考』, 大空社, 1991, p. 86.
- 2) 伊澤修二 山住正巳校注『洋楽事始 音楽取調成績申報書』, 平凡社, 1971, p. 41.
- 3) 前掲書2), pp. 160-161. および山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』, 東京大学出版会, 1967, p. 100.
- 4) 池田小百合: なっとく童謡・唱歌, <http://www.ne.jp/asahi/sayuri/home/doyobook/doyo00meiji1.htm>, (2017.06.23).

- 5) 前掲書2), p. 41.
- 6) 毎日新聞学芸部『歌をたずねて 愛唱歌のふるさと』, 音楽之友社, 1983, pp. 16-17.
- 7) 櫻井雅人「唱歌集の中の外国曲 『小学唱歌集』を中心として(1)」, 『言語文化41』, 一橋大学語学研究室, 2004, p. 7.
- 8) Moto Saitoh: 日本初の『小学唱歌集』, <http://www.geocities.jp/saitohmoto/hobby/music/primaryfiles/primary.html#17>, (2017.06.23).
- 9) 松村直行『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ 明治・大正・昭和中期』, 和泉書院, 2011, pp. 63-64.
- 10) M.Koster, Grosses Deutsches LIEDERBUCH (Köln: Neumann & Göbel Verlagsgesellschaft, 1984), p. 187. C.Schmölders, Das grosse Liederbuch (Zürich: Diogenes Verlag AG Zürich, 1975), p. 51.
- 11) 安田寛『「唱歌」という奇跡 十二の物語 讃美歌と近代化の間で』, 文春新書, 2003, p. 51.
- 12) 竹内貴久雄『唱歌・童謡100の真実—誕生秘話, 謎解き伝説を追う』, ヤマハミュージックメディア, 2009, p. 13.
- 13) 安田寛『日本の唱歌と太平洋の讃美歌—唱歌誕生はなぜ奇跡だったのか』, 東山書房, 2008, pp. 28-29.
- 14) 手代木俊一『讃美歌・聖歌と日本の近代化』, 音楽之友社, 1999, p. 25.
- 15) 前掲書1), p. 209.
- 16) 伊澤修二「メーソンを弔ふ」, 『同聲會雑誌』第6号(1897), pp. 36-37.
- 17) 伊澤修二「予が關係したる創業教育」, 『教育時論』第六三五号, 開發社, 1892, p. 10.
- 18) 湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』, 風間書房, 2001, p. 193.
- 19) 伊澤修二君還暦祝賀會『樂石自伝教界周遊前記』, 明治45年(1912), p. 23.

- 20) 前掲書 11), p. 47.
- 21) 山東功『唱歌と国語 明治近代化の装置』, 講談社, 2008, pp. 92-93.
- 22) 小山章三「蝶々」, 『日本童謡事典』, 東京堂出版, 2005, pp. 126-127.
- 23) 旗野十一郎『小学唱歌集評釈』, 同文館, 1914, p. 31.
- 24) 前掲書 9), pp. 65-68.